

負けず嫌いの競歩大会

宮 淑子 (高15回)

青春時代が夢なんて

あとからほのぼの思うもの

青春時代の真ん中は

道に迷っているばかり

森田公一が歌った「青春時代」である。私はこの歌のフレーズが大好きで、今でもよく口ずさむ。なぜなら、からだも心も子どもから大人へと成熟していく思春期のころは、これから足を踏み入れる世界への期待やら不安やらで一杯で、あまりいい時代だとは思えないからだ。

からだが性的に成熟していくこの時期は、「からだを通して大人に目覚める」といってもいい時期だが、生理が始まり、第二次性徴で丸みを帯びていく自分のからだは、あまり好きになれなかった。そして、やたらと男の子の視線を感じて、「女らしく」振る舞おうとする自分

自身も好きになれなかった。

そんな自分を持って余しているときに出会ったのが、飯田高校で毎年四月、伝統行事として行われている強歩大会だった。旧制中学時代からのパンカラの気風が残る行事なのだろう。男子は六十キロ、女子は四十キロ。山間を徹夜でひたすら歩くのである。

「女子の希望者は男子コース六十キロに挑戦してもいい」と事務局の張り紙にはあった。当時、私は音楽班に所属していたが、それを見て「挑戦したい」という女子が三人出た。全校生の割にも満たない女子は、目ごろからまるで男子の添え物的扱いだったから、不満分子が「距離の格差」に反発したのだろう。私もそうだった。

しかも、負けず嫌いの私は、強歩大会に備えて、ひそかに体力を付けることにし、朝、早起きして小学校の周りを走った。その光景を国語教師に見つかってしまった。



●みや・よしこ
昭和20年、飯田生まれ。フリージャーナリスト。教育問題、女性問題のルポ、評論、講演を手がける。セクシユアル・ハラスメントの言葉を社会化した一人。著書に『黙りこくる少女たち』『男たちの更年期クライシス』など。



中央で、婉然と（？）

「おまえたち、女子がこんなにまでして準備をしているんだぞ。女子になんぞ負けるでないぞ！」と男子は微を飛ばされたらしい。

当日は、校庭にトレパン姿の全校生が集まり、午前0時をスタートに強歩コースに繰り出した。腰に手ぬぐいをぶら下げて、真っ先に駆け出す男子の猛者たちがいた。そうか、強歩大会と言えども、全コースを走ってもいいのかとこのとき思ったものだ。

漆黒に近い夜の闇。くねくねした山間の道。要所ごとに設けられた関門。近所の方のお茶やおむすびの接待

……六十キロに挑戦した女子の猛者たちは、互いに励まし合いい、ずっと固まりで歩き続けた。ただし、足は疲れて棒のようになるし、睡魔も押し寄せた。そんなときは大きな声で歌を歌った。音楽班だから合唱曲が多かったが、「月光仮面」や「怪

傑ハリマオ」の歌も飛び出した。

「オーイ、辛くなったら道ばたに腰を下ろせ。救護車がただちに運んでってやるぞ！」と、真っ赤にほてった顔を見て、要所要所で待機する教師が声をかけた。

「オレ、もうダメだあ！」と何人かが落伍者となって、車にさらわれて行った。

男子なんかは負けてなるものか！

はるか遠く。民家の明かりが手招きするかのようにはゆるら灯って、ともすればギブアップしたくなる気持ちを元気づけてくれた。ホラ、もう少し、ホラ、もう少し、と。抜きつ抜かれつのレースは、明け方まで繰り広げられた。太陽が淡い光線を落とすころ、規定の時間内に女子の猛者たちは全員、校庭の土を踏みしめることができた。「ヤッター、ヤッター！」と小躍りしたあのとときの感動は、今でも忘れられない。

そして、手元にセピア色になった二枚の写真が残った。一九六一年四月二十七日、二十八日、強歩大会と記されたその写真の私は十六歳。しなやかで強靱な肉体を誇るかのように、胸を張り、婉然と（？）微笑んでいる。男女に性差（生物的性差を除いて）なんてない。あるのは個性差なんだということをもっと体感した私はきつとあのととき、フェミニニストとして誕生したに違いない。

一九六一年四月二十七日、二十八日、強歩大会と記されたその写真の私は十六歳。しなやかで強靱な肉体を誇るかのように、胸を張り、婉然と（？）微笑んでいる。男女に性差（生物的性差を除いて）なんてない。あるのは個性差なんだということをもっと体感した私はきつとあのととき、フェミニニストとして誕生したに違いない。